

特別寄稿

新型コロナウイルス感染症拡大状況での大学教育

益 田 圭

はじめに

2020年1月6日に中国武漢での原因不明の肺炎について、厚生労働省が武漢からの帰国者に対して受診や渡航歴の申請を求めた注意喚起をおこない、1月14日にはWHOが新型コロナウイルスを確認し、1月16日には日本国内で初めて感染者が確認され、1月30日にはWHOが「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言する。

安倍首相は2月27日に政府の対策本部で、3月2日から全国すべての小学校、中学校、高校などは春休みに入るまで臨時休校とするよう要請する考えを示した。その後、4月7日には、大阪を含む7都府県に緊急事態宣言を発出、4月16日には対象を全国に拡大することとなる。

こうして世界、そして日本は新型コロナウイルスの猛威にさらされていくこととなり、教育現場も新型コロナウイルスへの対応を余儀なくされることとなった。新型コロナウイルス対策の専門家会議が呼びかけた、①換気の悪い密閉空間、②多くの人が密集、③近距離での会話や発声（密接）という3つの条件の重なり、いわゆる「3密」は、教育現場での対面授業の状況そのものであり、こうした「3密」を避けつつ、いかにしてこれまで同様に効果的な教育を維持していくのかという問題と直面することとなったのである。

本稿では、新型コロナウイルス感染症拡大状況での大学教育について、相愛大学での対応について振り返りをおこない、さまざまな問題や課題について検討をおこない、そして、今後の大学教育への展望を考えてみたい。

相愛大学での対応

まず、今回の新型コロナウイルス感染症拡大状況での、教育的な対応について主なものを振り返ってみたい。

①オンラインでのオリエンテーション

政府の一斉休校要請を受け、3月12日の大学評議会において、新型コロナウイルス感染症拡大のため2020年度の授業日程の一部変更をおこない、授業開始日を4月10日から4月20日に変更し、在学生登校開始日を4月8日、新入生登校開始日4月10日を変更した。この日程の変更に伴い、オリエンテーションの内容を見直し、短縮した形での実施を計画した。

しかし、その後の新型コロナウイルスの感染拡大により、4月6日に対面でのオリエンテーションを中止し、オンラインによるオリエンテーションと履修登録をおこなうことを決定した。対面でのオリエンテーションの中止に伴い、それ以後の資料配信、連絡はポータルサイトからおこなうこととなった。新入生については、ポータルサイトからの連絡ができなかった

ため、ホームページ上での掲示、資料の郵送、電話での連絡などをおこなってポータルサイトの利用を促し、ポータルサイトからの連絡の態勢を整えた。

新入生の履修登録指導については、各学科において、履修モデルを作成して、新入生が履修モデルをベースに登録できるようにするなど工夫をおこなった。

②対面に代わる方法での授業開始

文部科学省の3月24日付「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」によって新型コロナウイルス感染対策として、対面授業の代わりに遠隔授業を活用することやこうした遠隔授業を大学設置基準で定められている上限60単位に含める必要がないことなどが示された。授業開始日が4月10日から4月20日に変更されたが、新型コロナウイルスの感染防止のためには、対面に代わる方法での授業対応が必要な状況であり、また新入生についてはオンラインでのオリエンテーションや履修指導が間に合わない状況であったため、2～4年次配当で、専任教員が担当する対面授業に代わる方法で実施可能なものに限り4月20日より授業を開始し、1年次配当科目や非常勤講師担当科目については、5月6日まで休講とすることとした。この段階では、5月7日より対面授業を実施する予定であったが、その後、緊急事態宣言の解除が5月末の見込みとなったため、対面授業の開始を6月1日からに変更した。

対面授業に代わる方法での授業については、受講生の混乱を避けるために、ポータルサイトのクラスプロフィールを利用することを推奨し、学生用と教員用のクラスプロフィールのマニュアルを作成した。

③対面授業の開始

6月1日から7月4日までは、段階的にどうしても対面での授業が必要な科目に限り、対面授業を実施することとした。新型コロナウイルス感染リスクに配慮し、通学・通勤時間、学校生活での「3密」をできるだけ回避する為、授業時間を変更して対面授業の時間を短縮した。また、使用教室を見直してのソーシャルディスタンスの確保、マスク着用、授業前の手洗い、机、キーボード、マイクなどの清拭、換気の実施、グループ活動を避けるなどの感染防止対策を徹底することを要請しての対面授業の開始であった。その後、7月6日からは、授業時間を平常時の時間である90分授業に戻して授業を実施した。前期授業終了後、3つの大教室の固定机を可動機に改修し、対面授業での使用可能教室確保のための対応を実施した。

後期授業は、前期同様どうしても対面での授業が必要な科目に限り、対面授業を実施したが、授業時間は通学時間帯のラッシュを避けるために、授業開始時間を遅らせた授業時間で実施した。

④相愛モデル

8月6日の全学教務委員会において、大阪府による「学校における新型コロナウイルス感染拡大第2波への備え」を参考にした「新型コロナウイルス感染症に対する本学の授業方針（相愛モデル）」を策定した。後期授業に関してもこの相愛モデルをベースに授業を開始した。

多くの大学が、感染対策として対面授業に代わる方法での授業を実施する中、学生たちの大学に通えないことの不安や不満が社会的に注目され、文部科学省の9月15日付「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について（周

知)」において、「豊かな人間性を涵養する上で、直接の対面による学生同士や学生と教職員との人的な交流等も重要な要素であること」に留意し、「感染対策を講じた上での面接授業の実施が適切と判断されるものについては、面接授業の実施を検討すること」という通知がなされる。

この通知を考慮して、相愛モデルの見直しがおこなわれ、10月8日の全学教務委員会で、相愛モデル1における「どうしても対面授業の実施が必要な科目に限り対面授業」から「対面授業」の実施が適切と判断される科目は、対面授業」へと文言が修正された。

12月3日、大阪府は大阪モデルを「赤信号」に引き上げたが、教育現場では赤信号を適用しないことを決定したため、相愛モデルもモデル1のままでの授業の実施となった。

問題点と課題

つぎに、今回の新型コロナウイルス感染症拡大状況での対応から、その問題点と課題について考えてみたい。

①新入生のオリエンテーションと履修登録

新入生の多くにとって、授業の選択や時間割の作成など、大学での学びはこれまでの学びとは質が異なるものである。こうした学びの始まりであるオリエンテーションが対面でおこなうことができなかったことは、大きな問題点である。教学課、各学科とも初めての状況にもかかわらず非常に熱心に丁寧な対応をおこなったため、対応することができたが、やはり履修登録のミスなどが目立ったようである。

今後、同じような状況になったときに今回の経験をどのように活かして効果的なオリエンテ

ーションをおこなうことができるのか、また想定されるミスに対してどのようにフォローすることができるのかを今後の課題だと考えられる。

②対面に代わる方法での授業

対面に代わる方法での授業については、ポータルサイトのクラスプロファイルの利用を推奨した。これはそれぞれの担当教員が独自の方法やツールを使って授業を実施した際に受講生が混乱すること、通信環境が追いつかない学生がすることなどを懸念したためである。

また、6月1日以降は対面授業と対面に代わる方法での授業が併存する形となり、対面授業を受講する学生が大学に登校して、大学内で対面に代わる方法での授業を受けることが想定される状況となった。しかし、大学内でのWi-Fi環境が十分ではなかったため、学生がWi-Fiを使える場所に密集することを避けるために、オンデマンド型の授業を推奨することとなった。

遠隔授業においては、同時双方向でグループ討議なども可能であるツールがあり、授業の教育効果を高めるためにはこうしたツールの利用が望ましいと考えられる。このため、学内や学生たちの通信環境の充実、教員のツールの利用スキルの向上、そのためのサポート体制などが今後の課題だと考えられる。

③学生の交流

新型コロナウイルス感染症拡大状況下で大きな問題となったのは、文部科学省の9月15日付「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について（周知）」でも指摘されているように、学生間や学生と教職員間の交流が難しかったこ

とは大きな問題となった。「友達を作れない」「先生に気軽に質問できない」といった問題は学生の学習意欲とも直結する可能性がある大きな問題である。時差・分散登校、ツールを活用してのリモート会話など感染防止と人的交流をどのように両立していくのが今後の課題となるだろう。

今後の大学教育への展望

ここでは、今回の新型コロナウイルス感染症拡大状況での経験が今後の大学教育にどのように活かせるのかについて、授業を実施した中で、個人的な経験なども含めて考えてみたい。

教室での対面授業においては、映像を上映したり、印刷資料を配布するなどして、理解を深めることがおこなわれるが、対面に代わる方法での授業においては、配布資料や上映資料などの著作権の問題も大きな問題となる。そのため、オンデマンドで、インターネット上に公開されている資料に受講生がそれぞれアクセスして、理解を深める形で授業をおこなった。オンデマンドでは、受講生がそうした資料に興味を持ってさらに関連する資料を探してみることもでき、また資料を視聴するペースもそれぞれの学生のペースでおこなうことができる。これは対面授業での、映像の一斉上映や印刷資料の配布より授業内容の深い理解に効果的であったと考えられる。

また、動画配信型のオンデマンド授業については、倍速での再生や、繰り返しての視聴の効果について、他学などでの報告で多く語られているようである。知識付与型の授業であればこのように受講生のペースで受講スタイルを選択することが好評だったようである。

そして、遠隔授業で、学生と教員間のコミュニケーションが活性化したという報告も耳にする。これは他の学生が多くいる教室では、自分自身が授業の主役であると感じることができず、なかなか主体的になれずに質問しない学生たちが、対面授業に代わる方法で授業を受けることで、自分自身が授業を受けているという実感をもって受講できているからなのかも知れない。

このように、対面授業に代わる授業方法での授業で、これまでにはなかったプラス面も見えてきたことは今後の大学教育にとって大きな財産となるのではないだろうか。たとえば、知識付与型の内容であれば対面授業に代わる方法の有効性が想定される。こうした経験を活かし、知識付与を課題としておこない、その知識について発展的な課題に取り組んだり、学生間で討論をおこなう反転授業の実施に活かしたりすることもできるのではないだろうか。

おわりに

今回、新型コロナウイルス感染症拡大状況での大学教育について、相愛大学での対応、その問題点と課題、そして今後の大学教育への展望という点から考えてきた。正直なところ、新型コロナウイルス対応については、すべてが初めてのことなので、その場その場でベストではなく、ベターと思われる対応を重ね続けてきたと感じており、もちろん十分に対応できなかったことも多い。まだ新型コロナウイルス感染症拡大状況は収束しておらず、今後も初めての状況での対応を強いられると思うと頭が痛くなるが、この「貴重」な経験を少しでも今後の大学教育に活かしていければと思う。